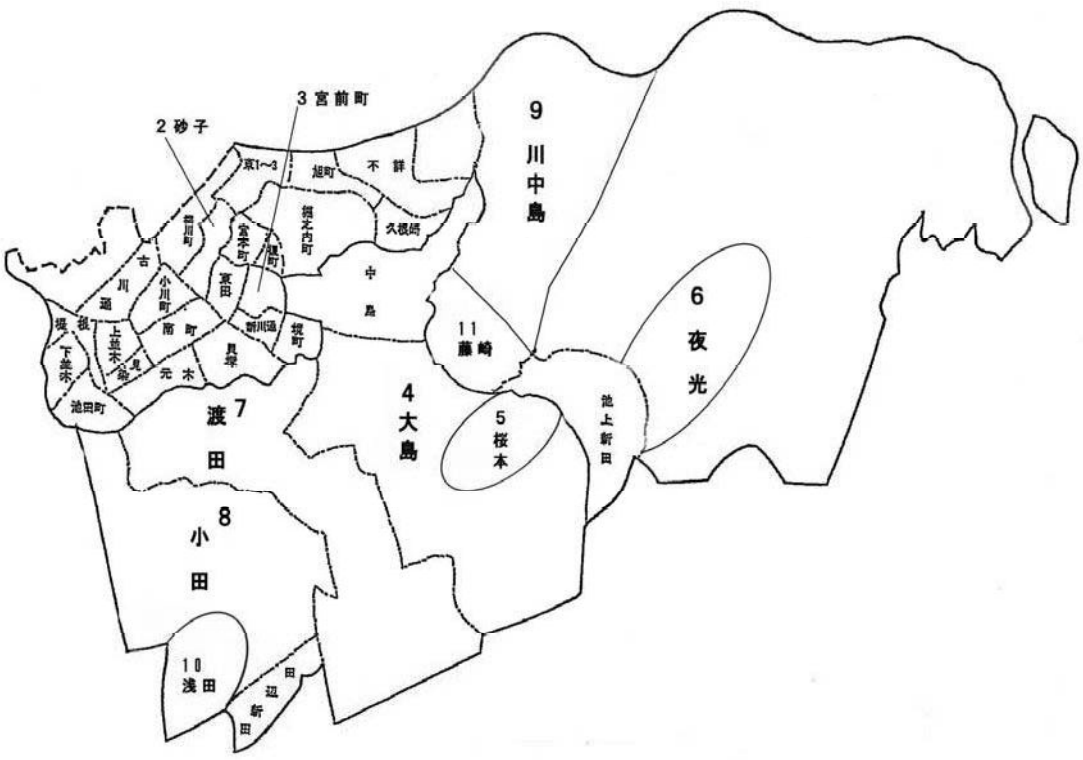
川崎区


2 砂子
3 宮前町
9 川中島
京1～3
旭町
不詳
堀之内町
久根崎
宮本町
幸町
中島
宮田
小川町
南町
新川通
幸町
元木
池田町
渡田
7
4 大島
5 桜本
11 藤崎
6 夜光
池上新田
小田
8
10 浅田
新田

川崎区のなりたち

中世に川崎郷とよばれていたこの地域は、江戸時代になると、小さな多くの村に分けられました。

川崎宿は東海道の第二宿として繁栄しましたが、宿内は四つの町に分けられていました。久根崎(くねざき)町・新宿(しんしゅく)町・砂子(いさご)町・小土呂(こどろ)町です。その東側に農村部の村々が広がりました。堀之内・川中島・大師河原・稲荷新田(いなりしんでん)・池上新田・中島・大島・渡田・小田・下新田の村々です。(後に田辺新田ができます)

明治維新の後、世の中は大きく変わります。町や村の形も変わりました。宿場制はなくなり川崎宿はなくなりました。汽車が通り川崎停車場ができました。

明治22年、市制町村制の施行で町や村の合併が進められ、今までより大きい町村がつくられます。川崎宿の四つの町に堀之内村を加えて川崎町となりました。川中島・大師河原・稲荷新田・池上新田が合併して、大師河原村がつくられました。中島・大島・渡田・小田・下新田・田辺新田の村々が合併して田島村がつくられました。

明治末から大正にかけて、東京湾沿岸の埋め立てが進み、大きい工場が沢山建てられるようになり、工業化が進み、人口も急速にふえました。

大正12年大師河原村は大師町、田島村は田島町となりました。大正13年、川崎町は大師町・御幸村と合併して川崎市となりました。昭和2年には田島町が編入されました。

戦後、沿岸地域の埋め立てが急速に進められ、石油化学工業のコンビナートが進出し巨大工業地帯となりました。現在、多くの町々が賑やかに活動して、川崎市の中心部となっています。

カワサキの　ほんとの意味は？

川　崎　市【KAWASAKISI】

❍場所

市名であり、市内ではもっとも南の地域です。

❍由来

大きな川の河口では、上流から流されてきた土や砂が溜まります。そうした土砂のつもったところを三角洲（別名：デルタ）と呼びます。デルタ地帯では、さらに海からの砂が溜まり、海側に出っ張る形になるため、そうした地名を「崎」とよぶことが多いのです。

つまり、この川崎は多摩川がつくった河口のデルタ地帯という意味での「川崎」だったのです。同じような意味での川崎地名は、全国に 30 箇所程あります。

エピソード

全国に「カワサキ」地名は川崎・河崎ふくめて 140 箇所あります。そのうち 110 箇所は、河口ではなく川の上流域・中流域に存在するのです。この場合の川崎の「サキ」は「崎」の意味ではないことになります。

川崎デルタ（明治 14 年迅速図）

古くは「前」のことをサキと言いました。ですからこの川崎のサキは前ということでしょう。「川前」は川を前にする地域・川にのぞむ地域という地名になります。

「川前」がのちに文字の表記を変えられて、「川崎」と書かれるようになったと思われます。このような「川前」＝「川崎」の地名と、わが川崎市の「川崎」とは由来がことなる、ということになります。

砂地をあらわす言葉なの？

砂　子【ISAGO】

❍場所

川崎駅の西南地域です。江戸時代には東海道川崎宿の中心としてにぎわっていたところです。現在の町名は、砂子 1～2 丁目・駅前本町・東田町・古川通の四つになっています。

❍由来

いさごというのは、古い言葉で「砂・砂地」をさす言葉です。

川崎の地は、多摩川の河口にできたデルタ地帯の上にできた町です。そのなかでもこの地域では川が運んできた「砂」が特に目立ったので、砂地を意味する「いさご」の名で呼ばれたのでしょう。

エピソード

戦国時代(15～16 世紀)太田道灌(おおたどうかん)がこの地を通過したのですが、その時つぎのような歌をよんだといいます。

「かもめいる　いさごの里を　来てみれば　はるかに通う　奥つ浦風」　約 500 年前の戦国時代にいさごという地名がすでに使われていたことがわかります。

言い伝えでは、いさごの地名の由来はもっと古く、平安時代の初め（10 世紀頃）にさかのぼります。土地の漁師が海岸で薬師さまの像を拾い、それを砂の上に安置してまつったことから、砂子の地名がおこったといいます。その薬師さまが、1 丁目にある宗三寺の本尊であるとされます。

戦国時代には、小田原北条氏の家来の間宮豊前守の館が、いま宗三寺のあるところにあったと伝えられています。江戸時代には佐藤本陣がこの砂子に置かれて、川崎宿の中心としてにぎわったのです。

砂子（旧東海道の通り）

どこのお宮の前だろう

宮前町【MIYAMAETYOU】

❍場所

稲毛神社のあるところという意味で「宮本町」、また、その神社の前の地域ということで「宮前町」の町名が生まれました。

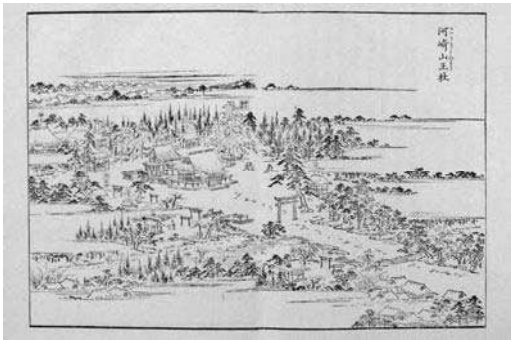
現在、宮本町には川崎市役所、宮前町には教育文化会館や宮前小学校があります。

❍由来

この町名は、江戸時代このあたりにあった堀之内村(ほりのうちむら)の字名(あざめい)「宮前耕地」からとったものといわれています。戦国時代から使われている古い地名です。

この堀之内村という村名も古く、平安時代のなかば(11 世紀頃)、このあたりに「河崎荘」（かわさきのしょう）と呼ばれる荘園（京都の貴族の所有地）があったようです。そして、この土地を開いたといわれる武士、河崎冠者基家（かわさきのかじゃもといえ）の館（やかた）が置かれていたようです。この館が周囲に堀をめぐらしていたので堀之内の地名が生まれたという話です。

エピソード



「江戸名所図会」河崎山王社（稲毛神社）

稲毛神社

この河崎荘の総鎮守（そうちんじゅ＝全体の氏神）が河崎山王社（かわさきさんのうしゃ＝現在の稲毛神社）です。川崎で最も大きい神社で、のちの江戸時代には川崎宿の総鎮守とされていました。

山王社は、平安初期に近江(滋賀県)の日枝山王社を勧請(かんじょう＝神様の御霊を移して分社をつくること）したもので、明治維新に稲毛神社と名を改めたものです。

大　島【OOSIMA】

❍場所

川崎区の中央部から、東がわの海岸までの地域の広い地名です。江戸時代には村名としてかなり広い地域をさす名前でした。今の町名でいうと、大島 1～5 丁目・大島上町・追分町・桜本 1・2 丁目・浜町 3・4 丁目・浅野町・池上町の地域です。

❍由来

川崎区は、多摩川の河口ちかくにできた三角洲（デルタといいます）地帯にあります。デルタは、川の上流から流されてきた土砂がたまりつもった低く平らな土地です。河口ちかくですので、海が運んできた砂もつもります。こういう土砂のつもったところを寄洲（よりす）とか浮洲（うきす）といいますが、そういうところには、まわりよりやや高くなったところもできます。そういうやや高くなった寄り洲などをシマといいます。

川崎区には、中島とか川中島などのシマ地名がありますが、大島はこのシマがまわりのシマにくらべて大きいため、大きいシマということで大島とよばれたのでしょう。

エピソード

明治 22 年、旧大島村・中島村・渡田村・小田村などが一緒になり、渡田・小田の田と大島・中島の島をとって田島村となりました。

大正 12 年に田島町となり、昭和 2 年川崎市にこれが編入され、そのとき町名としてはいったん消滅します。ただ広い地域の地区名として一般の間に残りました。それが、昭和の住居表示のとき、東渡田の一部が田島町と名付けられ、田島の町名が復活しました。昭和 48 年のことです。

大島三丁目付近

桜の木に関係あるのだろうか

桜　本【SAKURAMOTO】

❍場所

大島の東隣りに、桜本 1～2 丁目があります。もとは中島村の字名（あざめい）として、明治のはじめに「桜本耕地」(さくらもとこうち)という呼び名でつくられた所です。古くは、海岸堤防（海沿いの潮よけの土手）の外の海でした。明治のはじめに干拓（かんたく＝海の水をもっと外でせきとめて、浅瀬の水を流し出して陸地にする）によりひらかれた新しい土地です。

❍由来

この土地の古い家柄の吉沢家の屋敷神(やしきがみ)にお玉稲荷（いなり）があり、その祠（ほこら）の脇に大きな桜の木があったのが、桜本の地名の由来だといわれています。

また、別の説もあります。浜町との境に、八間堀(はっけんぼり)という堀割りが流れており、その土手に桜並木がつくられ、この堀割りが「桜堀」と呼ばれました。その桜堀のつけ根に当たるので、ここが桜本と呼ばれるようになったということです。

エピソード

エルロード桜本商店街

戦前、日本の植民地政策により連れてこられた韓国・朝鮮の人たちがここには多く住んでいました。戦後、この人たちが暮らしのため安いドブロク（にごり酒）をつくり売り出しました。仕事帰りの労働者に喜ばれ繁盛したそうです。

こういうことが元となって現在のコリアタウンに発展し、「エルロードさくらもと」の名とともに川崎の新しい下町として賑(にぎ)わっています。

夜ひかる　不思議の海とは

夜　光【YAKOU】

❍場所

夜光は川崎区の東の海岸の地域で、現在は夜光 1～3 丁目という町名があります。昔は海だったところで、昭和にはいって大きな埋立て工事が行われて、現在の土地ができあがりました。

❍由来

夜光という地名には、「川崎大師」のはじまりの話が関係します。それによると、平安時代後期、尾張国（おわりのくに＝愛知県）の武士　平間兼乗（ひらまかねのり）という人物が、貧乏してこちらへ移ってきて細々と漁師の暮らしをしていたそうです。ある夜、夢枕にひとりのえらい坊さんが立ち、あるお告げ（おつげ）を残して消えたそうです。そのお告げとは「私の像が海に沈んだままである。そこは夜　不思議な光を発しているのですぐ分かる、お前が網をうって引き上げ、丁寧にそれをまつれ、そうすればお前に幸福がおとずれるであろう。」というものでした。

兼乗はさっそく、夜不思議な光を発する海へ出て、網を打つとお告げのとおり、弘法大師（こうぼうだいし）の小像を引き揚げることができました。兼乗は小さなお堂を建ててこれをまつり、のちに高野山の尊賢上人と協力して、大師像を本尊とする一つの寺を立ち上げました。そして、これに自分の名をとって平間寺（へいげんじ）となづけました。

以上が「厄除け(やくよけ)川崎大師」の起こりとされています。大師の東の海を、のちに「夜光の海」と呼ぶようになり、やがてその浅瀬が埋め立てられて「夜光新田」の名が生まれました。それが現在に引き継がれて、夜光 1～3 丁目の町名があるのです。

“夜光”の地名に深くかかわる川崎大師

川を渡るところが　もとの意味

渡　田【WATARIDA】

❍場所

川崎区の南側の地域で、大島の西隣り、小田の東隣りにあたります。現在の町名で、渡田1～4丁目を中心に渡田がつく町と、田島町・鋼管通1～5丁目・浜町の一部があたります。これらはみな江戸時代には「渡田村」とよばれた地域の中に含まれる所です。

❍由来

ワタリダは「渡る処」という意味の言葉です。多摩川は、中世以前は今とはちがい南を流れていた時期があったのです。南河原から南へ向い、またデルタ地帯を何本にも分かれて海へ流れていたと思われています。その一つが京町から南へ、もう一つが古川通を南へ向かい、この時期の多摩川を渡る所、これが「渡田」だと思われます。

エピソード

新田神社

全国を見回すと、古道(こどう)がその地方では大きな川を渡る処に、ワタリ＝亘・渡・亘理、ワタリダ＝渡田の地名が沢山みつけられます。

伝えでは、鎌倉時代の武将新田義貞の家来の亘理新左エ門早勝(わたりしんざえもんはやかつ)がこの地の領主であったことから「亘田」(わたりだ)という地名がおこったと言われています。この地に成就院というお寺がありますが、そのあたりが館の跡地と伝えられています。

新田義貞像

このあたりには御正作（みそさく）という中世的な地名が残っています。領主の直接支配の耕地のことで、「みしょうさく」が変化して「みそさく」となったものでしょう。

その亘理新左エ門早勝が、北陸で戦死した新田義貞の霊をとむらうため、その遺品をまつってお宮としたのが新田神社だそうです。

湿地の呼び名

小　田【ODA】

❍場所

川崎区の西南部の地域で、江戸時代には「小田村」と呼ばれていた所です。現在の町名では、小田 1～7 丁目・小田栄町 1～2 丁目・浅田 1～2 丁目・京町 1～3 丁目の各町にあたります。

❍由来

当地では海岸寄りに草地・芦原がひろがり、塩焼き場も置かれたといいます。オダというのは「湿地性の泥地・砂地」につく地名です。全国各地に小田・織田・尾田・緒田・於田などと呼ばれる所があります。表記はちがいますがみな湿地の多い土地という意味の地名で共通しています。小田原というのも同じでしょう。

中世以前の古い多摩川は、今とはちがい南河原から南へ流れたようです。デルタ地帯の低地を分流し、乱流して海へ入ったと思われます。小田地区はその流路に面するところで、低い湿地がひろがっていたのでしょう。

エピソード

円能院境内に祀られている区内最古の地蔵菩薩

小田の地名は戦国時代の文書に記載され、室町時代にはすでに開発され、村ができていたことが分かります。明治以後は、海岸寄りが浅野セメント会社により開発されて工業地化がはじまり、日本鋼管の進出などで現在の工場地帯ができあがってきました。

大きい川の中州のこと

川中島【KAWANAKAJIMA】

❍場所

川崎区の中央部北寄り、大師公園の西側に川中島 1～2 丁目があります。これは、江戸時代にこのあたりにあった「川中島村」の名をひきついだものです。

川中島村は、現在の町名では川中島 1～2 丁目・中瀬 1～4 丁目・大師町・大師公園・大師本町の町々をふくむ、広い地域をさすものでした。

❍由来

川中島というのは、シマ地名の代表のような名前です。多摩川の河口付近には、上流から流されてきた土砂がつもって、やや高くなった地形が作られます。川の中につくられた、そういう少し高くなったところをシマと呼ぶのです。地名としては、川中島は両側を川の流れにはさまれたシマの呼び名です。

エピソード

昔の川中島村の中に、川崎大師・平間寺（へいげんじ）があります。現在の大師町の町内にはいります。平安時代の後期、平間兼乗（ひらまかねのり）というもと武士だった人が落ちぶれて、このあたりで漁師（りょうし）をやっていましたが、夢のおつげで、夜に光る不思議の海から、弘法大師の像を引き上げ、それをまつったのがこの川崎大師のもとと、伝えられています。

隣接する大師公園

江戸時代には、将軍がお参りにくるほど大きなお寺になっていました。その江戸時代から現在まで、厄除け（やくよけ）大師として多くの人々から信仰をうけ、沢山のお参りの人でにぎわっています。

浅と田の合成地名

浅　田【ASADA】

❍場所

川崎区の中では南西部にある町で、住宅地域と工場地域から成り立っています。

❍由来

古い小田村の集落に浅間前（せんげんまえ）という地名があり、それに下新田村（しもしんでんむら）をあわせて、大正 11 年に「浅田町」の町名が出来ました。浅間前の「浅」と下新田の「田」とによる合成地名です。

もとになった浅間前の地名は、この地に浅間塚があったからです。浅間塚というのは、村人がうやまう富士浅間社(ふじせんげんしゃ)を頂上にまつった小高い塚のことです。

バス停には今も浅間前の地名が残っている

一方の下新田は、江戸後期に開かれた新しい村の名前でした。「新田」というのは文字通り「新しく開かれた土地」ということで、江戸時代なかば以降に開かれた土地につけられました。「下」は、鶴見に属する潮田地区のその下（しも）にあたるということからつけられたようです。これも明治以前からある古いものです。この両者をあわせて、新しい「浅田」がつくられたわけです。

エピソード

二つの町や村が合併した場合、その両方の文字の一部ずつを使い、新しい地名を作り出したものを、合成地名（ごうせいちめい）といいます。

東京の大田区という区名も合成地名です。東京都が 35 区制から 23 区制に移るとき、大森と蒲田が一緒になり、大森の大と蒲田の田をあわせて大田としたものです。川崎では多摩区の生田が合成地名です。明治の初め、上菅生村と五反田村が合併し、菅生の生と五反田の田をとって、「生田」としたものです。

「藤」はほんとは「富士」

藤　崎【HUJISAKI】

❍場所

川崎区の中央部のやや北寄りの地域で、東隣りは川中島、西隣りは中島です。現在、藤崎 1～4 丁目という町名がありますが、江戸時代には大師河原村の字名（あざめい）に「藤崎耕地」というのがあり、そこからとった町名です。

❍由来

このあたりは、昔は一面の田んぼがひろがる平らな土地でした。富士山もよく眺められるところだったので、「富士崎」と呼ばれました。それが後に「藤崎」と表記されるようになったということです。古い字の名が、そのまま町名になった例です。

エピソード

藤崎小学校付近も昔は一面の田んぼだった

富士崎を藤崎に改めたのは、池上家の人だろうと言われています。池上家は江戸時代はじめ、大田区の池上からこの地に入り開拓をすすめて、この地を荒地から耕地に変えた功績のある家です。もと住んでいたところから、この富士の良く見える土地に移転しました。もと居たところの「先き」で、富士の良く見える地で「富士先」、文字を藤と崎に換えての藤崎だそうです。